

語りの世界の話に参考になる話は、むしろ語りの世界の外にころがっているように思う。

他の世界の教訓をどれだけ、ひきつけて考えられるかもとても大事だ。

ワールドカップの日本の戦いが終わった。

ベルギーを相手に大善戦して、一時は勝てるかもというところまで行ってドラマチックに逆転負けした。

もし勝っていれば、次はスーパースターのネイマールひきいるブラジルと戦えたはずでそれを見られないのは残念だがでも、とてもエキサイティングな、いい試合だった。

朝の3時にめざましをかけてリアルタイムで全部見た甲斐があった。

あとから得点シーンだけハイライトで見て結果を知るのとは全然違う。

それは情報でしかなく、あれを見ている間の心の乱上下こそスポーツを見る喜びだった。

で、その試合の後、本田選手が「日本代表は4年前のワールドカップ以後なにが変わりましたか」と問われての、次のことば。

「自分たちありき、から、相手ありき。自分たちの良さをピッチ上で存分に発揮することを大前提として、相手がなにをだしてくるか、しっかり分析するところが大きく変わった」

とてもいいことを言っていると思う。

語りの会は、自分がこういう話をしたいという気持ちを頭にもちつつ、しかし、ステージに立って見て、ここはそれが語れる場か、それを聞いてくれる客か、という判断を常にすしりあわせていかなければうまくいかない。それなのに昔話や民話についてのうんちくを語ることはできるが、観客論をもちあわせない語り手が多いように思う。

大事なのは、自分が本気で存分語ることを大前提として、ものがたりを柱にここに自分とお客の楽しい時間をどうやって作りだすかということだ。

そこに想いをめぐらさず「今日はこの話を」と自分のつごうだけであるのはまさに「自分ありき」でしかない。

それで客席をつかめずに戻ってきて「今日の客はうるさかったね」というのはみっともないし、聞き手を育てるという頭がない。

よい聞き手が育つことで自分もよい語り手になれるのに。

本田選手のコメントを聞きながら、そんなことをちょっと思った。

かつて、AWAのプロレスチャンピオン、ニック・ボックウィンクルが

「チャンピオンの心得は？」とインタビューで問われた。

その返答も、ここにかぶる。

「相手がジルバで来たらジルバで踊り、ルンバできたらルンバで踊る」

なんてかっこいいんだ。

なかなか、ここまでのゆとりを持てるものではないけれど。

ぼくも相手が笑い話をもとめていると思えば笑い話を語り
こわい話をもとめていると思えばこわい話を語り、
そのあいまに今日はできると思えば、自分が暖めている話を
語れるというふうでありたい。